か，通訳係と思しき女性が流暢な英語で受け答えをしている．外国人の訪問は私が初めてだったろうP教団では見られなかったこの光景に感心し，話に聞き耳を立てていると，隣で陶酔していたあの女性に呼びとめられた．お茶のお誘いかしら，といういやしい予想ははずれ，ズィキルの後にシャイフの講話があることを教えてもらう．いわれてみれば，数は減ったものの，その場に残った数名の女性たちが，壁に設置されてある薄型テレビの前に陣取っている．画面に移ったシャイフは，先ほど，黒い長衣をまとい，輪の中でズィキルを指揮していたときとはずいぶん雰囲気が違い，ウィットに富んだ講話を行なっている．普段は弁護士として働くというシャイフは，いつも頭にタッケ（特に敬虔な男性が好む，礼拝時に被る帽子）を被り，厳格な口調で説教をするP教団のシャイフとは，だいぶ様子が異なるようだ．煙草を吸いながら説教をする彼ならば，ズィキルの後に女性たちがチャイを飲むことも許しているかもしれない．

このように彼女たちと一緒に修行に参加していると，タリーカが偏見や嘲笑の的となっているというトルコの現状を忘れてしまいそうになる．私の目には，彼女らの宗教実践は真摯なものとして映り，彼女たちの姿勢からは，ただ「神を想う気持ち」を感ずることができた．一方，タリーカを蔑視する人々がいることも確かであり，彼らが特別に悪意をもった人たちであるかというと，私にはそうであるとも思えない．タリーカに参加する人も，タリーカを批判する人も，どちらも「ふつう」のトルコ人であり，社会的，個人的に何らかの力が加わったときに彼らは衝突を起こす．宗教をめぐり，さまざま議論が交錯する現代トルコ社会を理解するためにも，ときに「ふつう」の人々が対立する争点となるタリーカに今後も注目していきたい．

---

# 安定化の進む国境地帯

## ──ワンカー陣地からココ村へ──

佐々木　　研 *

「ドーナ山脈の山頂からは我々のエリアだ，君の安全は保障する．ただし，ドーナ山脈の向こうから国軍と共に来れば君の安全は保障できない．」2004年7月にミャンマー連邦カ

* 東京大学大学院新領域創成科学研究科

レン州東部のココ村で，調査許可を求めた私に民主カレン仏教徒軍（DKBA: Democratic Karen Buddhist Army）の中隊長が告げた．この時，ようやく調査許可がおりたことで喜んだことを覚えている．私は，自給自足を営むカレンの調査をするために 2004 年から 2008 年までフィールドワークを行なったが，カレン州内の情報が乏しいためもあり，調査を開始するまでに 1 年を要した．カレン州東部が，事実上 DKBA の解放区であることもこの時になってようやく理解し始めたのである．その後フィールドワークを行なう時は，主にココ村を拠点にした．ココ村は，ミャンマーとタイの陸路貿易が最も盛んなミャワディ市の北方に直線で 16 km ほどの距離にあり，国境の一部を構成するタウンリン川の西岸に位置している．村は 1995 年に設立され，それ以前は反政府武装闘争を続けていたカレン民族同盟（KNU: Karen National Union）の拠点であった．この拠点はカレン語でコウムラ地区に位置していたが，対岸であるタイの地名にちなんでワンカー陣地と呼ばれていた．80 年代後半以降，国軍は KNU の主要な資金源である国境沿いの KNU 拠点に対する攻勢を強め，1995 年 2 月に KNU 最後の拠点であったワンカー陣地を陥落させた．この 3ヵ月前に KNU で内部分裂がおこり，政府に帰順したメンバーが中心となって DKBA を設立している．DKBA はワンカー陣地を陥落させてすぐにコウムラ駐屯地を設置し，駐屯地を囲むように住宅が建設されココ村と呼ばれるようになった．コウムラ駐屯地は DKBA 第 999 特殊大隊の本拠地となっており，この大隊はアジアハイウェイより北へタイ側のターク県境付近まで，ドーナ山脈山頂から東へ国境線までを支配地域としている．ココ村周辺では集団農場が広がり，とうもろこし，豆が生産されタイ側に輸出されている．国境では通関税が徴収され，これが第 999 特殊大隊の主な資金源となっている．2006 年以降はゴム，油ヤシが栽培され始め輸出に備えている．この大隊の支配地域にはメプレー川を中心とした平野が広がっている．そこでは，現在では希少な水稲栽培を主な生業とする自給自足社会がカレンによって営まれている．

カレン村落で調査を行なうには，ココ村から森林を切り開いて開通した幹線道路を通る．幹線道路はチークなどの木材を搬出し，タイ側へ輸出することを目的として 1995 年以降に順次延伸され一部は舗装もされている．チークの商業伐採が政府によって認められているのは DKBA のなかでも第 999 特殊大隊のみであり，ドーナ山脈以西やアジアハイウェイ以南の国境沿いに駐留する他の DKBA 部隊は認められていない．タイの木材業者はココ村にトラックを常駐させ，平地の奥にあるカレン村落に直接乗り付けてチークを積載していた．カレン村落に向かうには途中で検問を通過する必要がある（写真 1）．2006 年 2 月に初めてここを通過した際には，国軍兵士が詰めていた．この時期にカレン村落で調査を行なっていたところ，国軍が村内を通過したことがある．一列縦隊の隊形で前進する国軍が村を離れるまで，DKBA 兵士は銃を手前に保持し緊張した面持ちで国

写真 1　幹線道路上の検問

写真 2　建築ラッシュのココ村

軍を見送っていた．DKBA は国軍と協調し KNU と対立してきたが，完全には国軍を信頼していない様子が伺えた．

2006 年 3 月にココ村を訪れた時には，村内は建築ラッシュでトタン屋根の近代的な家屋が建ち始めていた（写真 2）．学校も建設され，通学する生徒は制服を着ていた（写真 3）．以前は不安定だったタイからの電力供給も安定し，ビデオ上映館も登場し食堂や衣類，加工食品などを販売する雑貨店も増えていた．雑貨店で販売される商品の多くはタイ側から運びこまれたものである．ある DKBA 幹部にパソコンの調子が悪いから見てくれといわれ，駐屯地を訪問したが，正門には「CAMP KOMURA」と英語の看板が掲げられていた．事務所には数台の液晶モニターのパソコンが並んでいた．さすがにインターネットには繋がっていなかったが．

2008 年 3 月に訪れた時には，商店街の建設が計画されており，予定地ではセメントが積み上げられていた．以前は平屋に住んでいた先の DKBA 幹部は，天井の高い 2 階建ての立派な家に住み，大型テレビでタイの番組

写真 3　制服を着たココ村の生徒たち

を見ている．ココ村では，比較的裕福な家庭の子どもたちはタイの学校に通学しタイ語も学習している．この幹部の子息もタイ語の書きとり練習をしていた．

ココ村は訪問するたびに発展していく様子が伺え，村の人口も増えているような印象を受ける．村内では飲酒が禁じられているが，夜間でも人の往来が多くタイ側に劣らずにぎやかである．ココ村郊外には第 999 特殊大隊大隊長のチットゥー大佐個人が保有する広大なゴム林が広がっている．DKBA は森林を焼き払い，ゴム林やとうもろこし畑をさらに拡大するなど，経済的な基盤を次第

に強固なものにしているようである．この時，カレン村落を訪問するため幹線道路上の検問を再び通過したが，そこに詰めていたのはDKBA兵士になっていた．また入国管理官が国軍兵士と共に村内に滞在し，住民に身分証明証を発行している最中だった．最初にこの地を訪れた時から4年が経過したが，その間に政府は国境域におけるDKBAへの統治委任を進め，両者の関係は軟化しつつあるようだった．この関係の変化はKNUが弱体化し，国境域の安定化が進行していることも一因であると思われる．ミャンマー政府は，2004年にキンニュン首相を更迭して以降，KNUとの停戦交渉の開催を拒否している．政府にとってKNUはすでに脅威ではなく，交渉する必要もない相手なのだろう．

一度，2006年9月にKNUの引率で調査を試みたことがある．この時はカレン村落に訪問できない日もあり，夜間は村内に滞在することが出来ず，山中にある駐屯地での滞在を余儀なくされたりした（写真4）．しかも駐屯地に通じる道は地雷原となっており，ガイドに「ケン，絶対に道から外れるな」と注意され，緊迫しながら先を行く兵士について行ったのである．3往復もすると，道順も覚えてすこし緊迫感も和らいだ，と思ったらスコールで川が増水し，別のルートで駐屯地へ帰る日もあった．この日は，村でふるまわれたコメ焼酎を飲んでいたが一気に酔いがさめ，また緊迫しながら夜道を進んだのである．KNUの引率で調査を実施したのはこの時が最初で最後となった．カレン州東部は，DKBAとKNUの支配地域が重複する競合地帯であるが，行動の優先権がDKBAにあることはKNU関係者へのインタビューからも確認された．両者のパワーバランスを，身をもって知った次第である．KNU関係者によると，後にこの駐屯地は放棄されたらしい．

**写真4　山中にあったKNU駐屯地**

2010年に入って，政府はDKBAのボーダー・ガード・フォースと呼ばれる国境警備隊への改編を計画しているようである．政府は，これまで非合法であった武装勢力に合法的な地位を与えることで，共存と非合法な武装勢力の存在といった法的な矛盾の解消を意図しているのかも知れない．第999特殊大隊は，改編に積極的であるようだ．ただ，アジアハイウェイ以南の国境域を支配地域とする国境開発旅団，あるいはこの旅団の一部が躊躇しているため，DKBA全体の改編はまだ進んでいないようである．

カレン州東部を訪れた本来の目的は，カレンの生物資源利用に関する知識，慣習，価値観，制度といった伝統的生態学的知識（TEK: Traditional Ecological Knowledge）を収集し，持続的な生物資源利用としての意義を考察して博士論文を完成させることだった．しか

し，流動的な社会環境によって村落の滞在が中断されるなど，調査は難航した．それに何といっても，複数の武装勢力が混在しながら安定化していく社会環境の動態に私自身が惹かれてしまった．そのため博士論文のストーリーは大分変わってしまった．メプレー川水系に居住するカレンは，おそらくタイに居住するカレンよりも早い時期に，異なったルートで水稲栽培の技術を導入し今に至っている．そのため，より多くの世代を経て蓄積された，地域特有の TEK が残存していることが期待できる．今後も機会があれば再度訪問して，今度は本当に TEK の収集に集中したいものである．しかし，本原稿を執筆している最中の 2010 年 11 月 8 日には，DKBA 国境開発旅団が国境の市街地ミャワディを一時占拠し，国軍と武力衝突したことがニュースに流れていた．ミャワディといえば最盛期の KNU ですら侵攻を避けていた街である．数日後には，この旅団の本拠地であるワレー近郊が，国軍の 2 個軽歩兵大隊に包囲されたとの知らせが現地から入った．国境の社会環境は今後も流動的な状況が続くのだろうか．だとしたらまだまだ目が離せない．